

# NEWSLETTER

## 2020年度研究関連活動報告

2019年12月初旬に、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の第1例目の感染者が報告されてからわずか数カ月間に世界中に感染が拡大し Pandemic と化しました。日本では、国内外で人の行き来が制限され、外教会でも当初3月に予定していた研究大会を延期せざるを得ない状況に陥りましたが、登壇者の皆様の変更を快諾して下さったおかげで、オンラインで無事開催することができました。

### ◆関西大学外国語教育学会第14回研究大会 順延開催

新型コロナウイルス感染拡大による自粛要請を受け、開催見送りとなっていた第14回研究大会を6月27日（土）にオンライン（Zoom）にて開催

#### 【記】

- ・日 時 2020年06月27日（土）13時00分～17時00分（12時45分～Zoom開場）
- ・会 場 オンライン開催（Zoom、申込者には後日方法を通知）
- ・事前申込 定員は先着順100名
- ・参加費 無料

#### <プログラム>

#### 【実践報告】13:00～14:00

①コミュニケーションに対する態度や能力を育成する授業作り  
～クラスルーム全体をコミュニケーションの場に～

岡崎隆文氏（東大阪市教育委員会）

②教科書を用いた読後活動と英文を書くことに対する生徒の苦手意識の変化  
堀米美恵子氏・光成範昭氏

（大阪府箕面市立第四中学校）

#### 【ワークショップ】14:10～16:40

「アクティブ・ラーニングは「夢中」になれる学習」

中嶋洋一先生（関西外国語大学教授）

### ◆関西大学外国語教育学会共催セミナー

テーマ：「外国にルーツを持つ子どもの教育保障を考える」

～可児市における不就学ゼロをめざす取り組みを例に～

日時：2020年12月19日（土）14:00～16:00

講師：小島祥美（こじまよしみ）氏

東京外国語大学世界言語社会教育センター / 多言語多文化共生センター准教授

- ・参加費：無料（要事前申込み）
- ・形式：Zoom（オンライン）
- ・主催：ヒューライツ大阪（一般財団法人アジア・太平洋人権情報センター）
- 共催：NPO法人おおさかこども多文化センター / 関西大学外国語教育学会

## 第14回研究大会 実践報告 ①

「コミュニケーションに対する態度や能力を育成する授業作りークラスルーム全体をコミュニケーションの場に」  
報告者:岡崎隆文氏(東大阪市教育委員会学校教育推進室 主幹)

岡崎先生の実践報告では、日頃取り組んでおられる授業作りのポイントと具体的な授業方法について、豊富な資料とともに、詳細にご紹介いただきました。

岡崎先生は「クラスコミュニティを育てること」と「自分の言葉を使う機会を持たせること」を二本柱に

- ①English Rich な授業
- ②言語活動の時間の確保
- ③即興性を高める
- ④表現力育成
- ⑤やりとり重視
- ⑥タスクの設定
- ⑦家庭学習との連携、

以上の7点を取り入れた授業作りを実践されています。

ご指導の原点は、アメリカでの日本語指導のご経験にあり、「とにかく生徒の様子をよく見ること。どれだけ良い指導でも生徒を見ていなければ、教師自身のエゴになる」という意識を常に持っておられるとのことでした。これは、学校種や教科に関わらず、教育に携わるすべての者が決して忘れてはならないことだと考えます。

また、生徒の気づきや発話を重視した4技能5領域の習得を支える指導として、文法指導、語彙指導、音声指導のあり方についても、ルーブリックや CAN-DO リストを示しながら丁寧にご報告くださいました。

コミュニケーション重視の授業では、ともすれば軽視されがちな文法・語彙・発音指導ですが、やはりこれらの知識に裏打ちされてこそその外国語能力だと思います。スライドで示された生徒たちの学習成果物からは、生き生きとした自発的な学習姿勢が感じられました。

最後に、今後の課題として「特別な支援を要する生徒への対応」  
「モチベーションが低い生徒への対応」「小中学校の一貫した教育」  
等を示されて報告を終えられました。(文責:神道美映子)



## 第14回研究大会 実践報告 ②

## 「教科書を用いた読後活動と英文を書くことに対する生徒の苦手意識の変化」

報告者:掘米美恵子氏・光成範昭氏(大阪府箕面市立第四中学校)

掘米先生と光成先生の実践報告では、小学校での英語教育経験者を対象に、小学校で得た英語力を中学校でいかに伸ばせるかを示してくださいました。

小学校で英語音声に親しみ、スピーキングやリスニング力をつけた生徒たちを迎えた初年度の指導では、中学入学後の生徒たちが単語の綴りや文法に悩み、次第に英語に対する苦手意識を高めてしまったことから、音と文字との関連性に着目し、「読める・話せる」力の育成を目指して、読後活動を重視した指導法を開発されました。その結果、「苦手意識よりも『できる』と感じる生徒が増えた」というご報告は大変興味深いものでした。

読後活動の指導前後および指導中の複数回アンケート調査を実施し、ボンフェロニ法による多重比較の結果、読後活動の指導が「文字や単語を書くこと」の意識を優位に向上させたことが明らかになったとのことです。その結果から、初年度はポスト・リーディング活動が不足していた、と分析されていました。

掘米先生と光成先生によると、音声でのインプットを十分にすることで内容を理解することが、リーディング力を高め、さらにはライティング力につながっていく、とのことでした。とにかくインプットを繰り返し、無理に学習を進ませないことにも気を配っておられました。具体的な授業の進め方としては、まずは音声で達成感を持たせ、その後、音と文字とを関連づけることを意識されたそうです。

- 1, 歌やオーラル・イントロダクションで達成感を持たせる。
- 2, 十分に音声をインプットしてから、リーディング指導として、通常音読→ルックアップ・リーディング→通訳読み(日本語から英語へ)へと段階を踏む。
- 3, サマリーライティングや質問文作成でライティング指導につなげる。

この他にも、文法解説には色分けカードを使用するなどの工夫もされていました。

今回のご報告は、今後、小学校英語を学んだ生徒を迎える中学校英語教育者にとって、大変示唆に富むものであったと思います。また、大学での第二外国語の指導にも大いに参考にさせていただきたいと感じました。大学では、二年目の第二外国語学習で苦手意識を持つ学生が少なくありません。つつい学生自主性に任せてしまいがちな音声によるインプットの重要性を、再認識させていただきました。

(文責:神道美映子)